

# 縄紋後期土器付着物における調理物の検討

Analysis of the Usage of Pottery in the Late Jomon Period

小林謙一・坂本 稔

KOBAYASHI Ken'ichi and SAKAMOTO Minoru

はじめに

## ①土器付着物の分析の概要

## ②分析方法

## ③事例

## ④分析

## ⑤結果と展望

### 【論文要旨】

本稿は、縄紋後期の生業活動において、海洋資源がどの程度利用されていたのかを見積るため、炭素の安定同位体比 ( $\delta^{13}\text{C}$  値) と炭素 14 年代をもとに、時期別・地域別の検討をおこなったものである。旧稿 [小林 2014] において、陸稲や水田稲作が出現する弥生移行期である縄紋晩期～弥生前期の土器付着物を検討した方法を継承して分析した。そのことによって、旧稿での縄紋晩期と弥生前期との違いの比較検討という目的にも資することができると思われる。

土器内面の焦げや外面の吹きこぼれなど、煮炊きに用いられた痕跡と考えられる土器付着物については、 $\delta^{13}\text{C}$  値が  $-24\%$  より大きなものに炭素 14 年代が古くなる試料が多く、海洋リザーバー効果の影響とみなされてきた。一方、 $-20\%$  より大きな土器付着物については、雑穀類を含む  $\text{C}_4$  植物の煮炊きの可能性が指摘されてきた。しかし、これらの結果について、考古学的な評価が十分になされてきたとはいえない。

国立歴史民俗博物館年代研究グループが集成した、AMS による縄紋時代後期（一部に中期末葉を含む）の炭素 14 年代の測定値を得ている 256 試料（汚染試料及び型式に問題ある試料を除く）を検討した。その結果、土器付着物の  $\delta^{13}\text{C}$  値が  $-24 \sim -20\%$  の試料には炭素 14 年代で 100  $^{14}\text{C}$  yr 以上古い試料が多く見られることが確認され、海産物に由来する焦げである可能性が、旧稿での縄紋晩期～弥生前期の土器付着物の場合と同様に指摘できた。

北海道の縄紋時代後期には海産物に由来する土器付着物が多く、その調理が多く行われていた可能性が高いことがわかった。東日本では縄紋時代後期には一定の割合で海産物の影響が認められるが、西日本では近畿・中四国地方の一部の遺跡を除いてほとんど認められない。これらは川を遡上するサケ・マス調理の結果である可能性がある。また、 $\text{C}_4$  植物の痕跡は各地域を通じて認められなかった。

以上の分析の成果として、土器付着物の  $\delta^{13}\text{C}$  値は、縄紋時代後期の生業形態の一端を明らかにし得る指標となることが確認できた。

【キーワード】 縄紋後期、生業、 $\delta^{13}\text{C}$  値、炭素 14 年代、海洋リザーバー効果